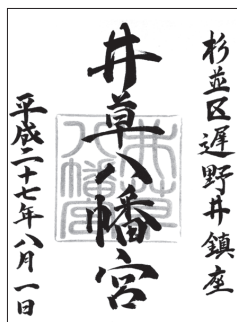


私の「みらい遺産」善福寺風致地区

野鳥図鑑画家 谷口 高司

先日、取材で、仕事と縁のある残したい景色は？との問い合わせを頂いた。「井草八幡宮と善福寺池のある善福寺風致地区」と即答したほど、杉並区の端のこのエリアは、私の大切な場所である。

池の水源は武蔵野三大湧水の1つ、遅ノ井の井戸だ。歴史は古い。源頼朝の奥州征伐の折、近くに鎮座する井草八幡宮に必勝祈願に立ち寄り、兵たちのために井戸を掘らせたものの水は出でこず、痺れをさらした頼朝が「井戸が遅いのう」と嘆くと、ぱっと地下水が吹きあげ、以降、連綿と



泉は沸き続けてきた。その井戸は戦後枯れてしまい、今はポンプで水をくみ上げている。

この水が“上の池”と呼ばれるボート池から、水路で、ヨシやスイレンが美しい“下の池”に入り、善福寺川となって杉並区を斜めに横断、11.8kmのところまで神田川に合流する。

私の記憶は、豊かな自然と共にある。善福寺池で2歳下の弟と小さな魚をとり、友と池の周りで虫と遊び、井草八幡宮の境内で蝶を追った日々が、野鳥図鑑画家としての下地となった。ここでの自然の出会いがなければ、40冊を超える著書を世に出すことなど叶わなかった。

私を絵の道に導いてくれた、市田則孝は、共に虫を追い、魚をとった竹馬の友だ。日本野鳥の会事務局長を経て、世界的な野鳥保護団体バードライフ・インターナショナルの副会長へ。英国王立鳥類保護協会から、2年に1回世界でただ1人、自然保護に大きな貢献をした個人に贈られる、RSPBメダルの、アジア初の受賞者となった彼の活動の根幹も、間違いなく幼かったあの日々であ

ろう。彼は今、全国各地で新農業問題に取り組み奔走している。

70歳を目前としてもなお、私たちを駆り立てる『今ある自然を守りたい』という思い。共に走り回りながら善福寺池の周りでみた、様々な自然の営みのおかげで持ち続けることができている。

昭和36年、二つの池を囲むエリアが都立善福寺公園となり、20年近く前、日本野鳥の会の金井裕さんが中心となって、炎天下、下の池のヨシの根止めをされ、野鳥の隠れ家も確保、水の流れもできた。両方の池にある3つの人が渡れない小島の存在もあって、野鳥に快適な池となっている。この地をこよなく愛す地主さんたちの屋敷林も、鳥たちの絶好の棲家となっていて、今年間ごとく普通に、60種以上の野鳥と出会うことができる。

戦前、父が理髪店を開業する際、下見にきて、武蔵野の面影が強く残るこの地に一目ぼれしたという。生き物好きだった父は、晩年、善福寺池の水路にホテルを戻すことに余生をささげた。店の下見にきた当時、日本野鳥の会創設者の一人中西悟堂氏がこの地に住んでいたことなど知る由もなかった。のちに理髪店の顧客となった悟堂氏の残した戦前の野鳥の記録は、今でも貴重な資料だ。

悟堂氏と父の琴線に触れたこの地の自然に生まれ、日本野鳥の会の図鑑を多く手掛けさせて頂いていることにも不思議なご縁を感じている。これからも自然保護のために命の限り尽力していく覚悟だ。

※11月のひと月ジュンク堂書店池袋本店7階壁面で「谷口高司画業40年の歩み展(仮)」を開催予定。

